

令和6年度地域包括ケアに携わる多職種合同研修会

～「顔の見える関係」から「多職種協働」、そして「チーム北空知」へ～

第1回 ケア・カフェきたそらち 開催結果・評価

項目	内 容
1 目 的	北空知における地域包括ケアシステムの構築を目指して、地域の保健・医療・介護・福祉の関係機関・施設・事業所等において、患者や利用者、地域住民の支援に携わる多職種の関係職員が一堂に会することが困難な状況にあっても、互いの役割を確認・共有し、切れ目のない支援・サービスが提供される多職種連携の関係づくりを構築するためのオンラインによる研修機会とする。
2 期 待 する効果・成果	○地域支援関係者、医療関係者等の多職種が情報交換・共有する関係性と環境が構築される ○多職種の交流の場を運営する組織ができる
3 日 時	令和6年10月10日（水）18：00～19：03
4 場 所	オンライン開催（ZOOM）
5 内 容	（1）9月26日開催の北空知看護研修会において『在宅での生活の支え方を考える』をテーマとし専門職の講演と具体的なケースの報告があった⇒上記研修会から見えた課題・意見をケア・カフェ形式で会話しながら理解を深める （2）グループワーク テーマ 「在宅での生活の支え方を考える」 カフェマスター 訪問看護ステーションいしずえ管理者 疋田健氏
6 出席者	医師1名、薬剤師1名、看護職16名、保健師8名、介護支援専門員3名、介護福祉士4名、社会福祉士3名、ソーシャルワーカー1、相談員2名、管理者2名、管理栄養士1名、リハビリ職2名、事務職3名、その他1名 合計 48名
7 結 果	（1）北空知看護研修会の内容の紹介 ○「チームで支える在宅ケア みんなが一步前」というテーマで、稚内訪問看護ステーション古川所長の講義を受けた。末期や認知症の事例から、最後まで自宅で過ごしたいという気持ちに寄り添う意思決定支援についての話や、利用者のために共通認識を持ちながら互いに気持ちよい連携ができるよう心がけているとの話があった。 実践報告では、訪問看護ステーションいしずえから本人の辛さを共感的に受け止め、利用者の思いに寄り添う支援についての報告や、保健所からは、人工呼吸機を装着して在宅療養されている方について支援者が諦めることなく、本人と妻の意向を丁寧に聞き、今ある資源で意向を叶えられる方法を探ることができたという報告があり、本人の意思決定支援や連携の重要性について考える機会となった。 ・今回は約1か月前の北空知看護研修会を話題提供とし（第1部）、ケア・カフェ当日をグループワークのみ（第2部）という構成とした。 ・2部構成については、グループワークをコンパクトにできる反面、第1部のテーマを思い出しながら話すという工程になり、脱線してしまいがちだった。 ・旭川で行われている本場のケア・カフェではテーマなしもあるが、逆にテーマが無ければ集まる理由（講師から何かを学べる）が低くなるので検討が必要。 （2）グループワーク ○Chat1、Chat2とも8グループ編成し、1グループ5～7人のランダム編成とした（ホストとカフェマスターの2名を除いてグループ編成） ○カフェ・マスターから進行方法と、自己紹介（氏名・所属・職種・最近ハマっていること）について説明があった後に Chat 1 が開始され、Chat 2、全体共有へと進行された

	○各 Chat の開催時間（Chat 1：20分、Chat 2：20分）が設定され、それぞれのグループメンバーのみで話し合い、設定時間により自動で全体画面へ戻る予定だったが、Chat 1 が設定ミスにより約10分で終了してしまい「時間が短すぎて、話があまりできなかった」との感想が複数あった ○参加者はオンラインでの会話や、端末の操作に慣れてきている様子。 北空知看護研修会の講義・報告を受けて、在宅での生活の支え方とは何があればできるのか、どうしたらできるのか、大切なことは何かなど、グループワークで話し合った。 ○カフェ・マスターの説明と全体のまとめがわかりやすく進行もスムーズだった
--	--

【小部会で振り返り】

○：達成できた △：ほぼ達成・まあまあ良かったが課題あり ×：達成できていない・良くなかった

項目	内 容
8 評 価	○地域の多職種連携の課題に即した企画だったか →「○」 ・在宅ケアをどのように考えるか、地域の課題に即した企画だった ・意思決定支援について事例を通し考える機会となり、企画として良かった ・研修会、ケア・カフェなど積極的に参加される方と顔の見える関係、連携はかなり進んできたと考えられ、研修内容は多職種連携の課題に即したものであった ・アンケート結果からの評価も必要 ○テーマの選定 →「○」 ・在宅ケアは誰にとっても身近なテーマなのでよかった ・在宅支援がテーマで意見が比較的出しやすい内容であった ・北空知看護研修会の結果報告があったので、テーマから具体的に話題を絞りやすかった。気軽に話すことができた ・9/26 研修会の内容を踏まえ、在宅ケアを振り返る内容であった ・活発に意見が出されいろいろな話題が話された ・事例発表者のいたグループでは事例に基づいた会話となり身近に感じられた ・訪問介護事業所職員が参加するグループでは在宅支援の最前線の支援を担う方々の話を聞けたり、実際の自分の親族の終末期の実体験を聞けたり、非常に充実したグループワークだった ○周知方法 →「○」 ・9/26 研修会での周知に加え、協議会事務局からメールアドレスの分かっている事業所はメール、それ以外は郵送で案内することとし、重複案内をせず適切に周知できた（管内108事業所） ○会場の状況 →「△」 ・ZOOM なので集合形式としての評価はできない ・事務局の設定ミスでグループワーク1の時間が10分となってしまう話し合いの時間が十分になかった ・グループワークはZoomのブレイクアウトルーム機能を利用して事務局が割り振っているが、何度経験を踏まえても事前申込と違う場合があり（一端末一人参加のはずが複数で参加している、当日参加・欠席など）なかなかうまくいかないため、共同ホストを設定するなどの対策が必要 ・Zoom 開催にも慣れてきたが、参加者にとっては飽きてきているようにも思う

プロセス	○小部会の打合せ・準備状況 →「○」 ・効率よく打合せ、準備ができた ・事前に役割や進行等について確認し、円滑に開催することができた ○小部会のメンバーそれぞれの役割を遂行できたか →「○」 ・役割が偏ることなく分担し、遂行できた ・事前の役割分担および臨時の zoom 打合せにより遂行できた ○参加者の状況 →「△」 ・ZOOM開催となってからアンケート回収率が悪い傾向があり前々回（アンケート記入⇒終了）68.0%、前回（記入⇒終了とはせず改めて要請）66.8%。今回50%（24／40人） ・参加者は、毎回の傾向で40歳～50歳代の出席が多く66.6%だったが、今回は若年層の参加もあり20歳代1名、30歳代で5名となった ・今回も若手医師・研修医に参加案内したが参加は得られなかった ・参加者が固定化されている印象 ・どのような募集をしてどのような反応があったかや、初回参加者が参加したきっかけやテーマに関心があったのかなどを評価に加えるとよいのでは ・初参加、若い方が少ないと思われるため「△」の評価となるが、興味を持って参加してもらうのは難しい ・ケアマネや管理者、病棟師長や中堅クラス看護師が参加するパターンが多いが現場職員（若い職員）にも声掛けが必要
結果	○参加者数 →「△」 ・定員100名としたが、申込みは49名、欠席は1名、計48名となった ・勤務市町別では、深川市32名（68.1%）、妹背牛町3名（6.4%）、北竜町8名（17.0%）、沼田町4名（8.5%）、滝川市1名。秩父別町0名※ ・委員等別では、協議会委員等が9名（18.7%）、小部会委員7名（14.6%）、委員等以外32名（66.7%）と、委員以外が半数以上※だった ・参加者のほとんど（95.8%）が、職場から参加した ・同じ職場から複数名の参加があった。初参加は1名のみだった ・参加者数と参加者の顔ぶれは、前回のカフェと差ほど代わり映えのない印象 ・想定人数について検討が必要 ・大きな職場では案内が回覧されていないことがある。例えば看護連携会議で周知・発言する等して参加するメリットを周知し隔々までいきわたるような対応が必要 ・対面を望む声と Zoom の手軽さがあつての参加という意見があり今後も継続した検討が必要 ○職種 →「△」 ・様々な職種の方の参加が確認できた一方、例えば看護師については市立病院以外に参加が無いため、職種別の評価は不十分と思われる ・院長の参加があったとしても、他の医師や関連職種への参加が促されていたのかのプロセスも評価に必要 ○参加者の満足度 →「○」 ・アンケートから、楽しさ、有意義さ、役立ち共に「そう思う」とした回答が半分以上を占めており、あまり思わないとする意見は1件だけだった。 ・オンライン研修は「便利でよい」20名（74.1%）で多くを占めるが、「話すタイミングが難しい」「対面がいい」などの否定的意見があった ・今後も参加したいかについては、「参加したい」が70.8%（前回82.5%）だった ・グループワーク1の時間が短かったため十分に話せなかった ○交流の場を手伝ってくれる人の確保ができたか →「×」 ・今回も質問への回答はなかった ・引き続き運営協力員の世代交代を視野に入れつつ取り組んでいく事が必要

	まとめ ○今後について、周知方法（各種会議で周知）や開催方法（ハイブリッド、他の研修と合同開催、時間設定）について検討が必要 ○他研修と関連した共通テーマ（意思決定支援～ACP等）による開催を検討することでより考える研修とできるのではないか 注：文末が「※」となっている文中の数値は申込名簿から使用。それ以外はアンケートからの数値を使用
--	--